

離職者訓練としての介護福祉士養成教育を受ける 社会人学生の意識変容

加藤 英池子^{*}

要約

現在、国は福祉人材の養成・確保のため、「離職者訓練制度」における介護福祉士養成事業を設置している。これを活用し介護福祉士養成施設に入学した年齢、学歴、職歴などが異なる多様な社会人学生に対して、介護福祉に関する認識と学習過程での学びについて、自由記述のデータをKJ法による質的統合およびKH Coderによるテキストマイニングによる分析で検討した。社会人学生の学びの過程には「学校で介護への良い思い(価値観)を持った」「人とともに人について勉強した」「本当に大切な考え方を実習で学んだ」「実習ではコミュニケーションが大切(であり、介護職への実感を得た)」「仕事や資格には知識が必要だと感じる」「一般学生とのクラスで(学習や人間関係の)大変さと多くの時間と体験を共有した」という六つの側面があり、また介護福祉に対する価値観と職務意識の変容には実習が大きく影響していることが示唆された。

キーワード 介護福祉教育、離職者訓練、利用者、テキストマイニング、KJ法

目次

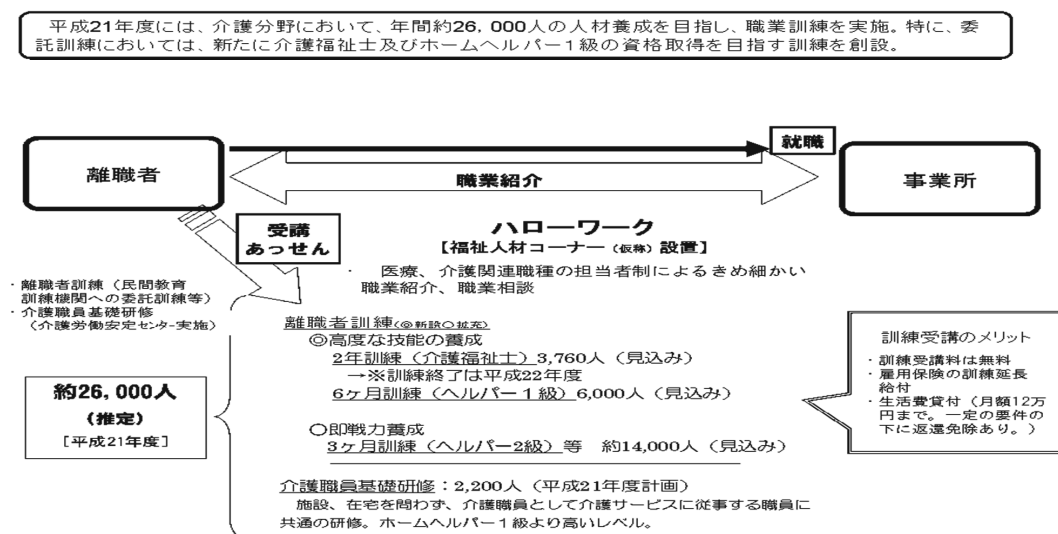
1. 研究の背景と目的
 - 1.1 離職者訓練としての介護分野の担い手となる人材育成の現状
 - 1.2 介護福祉分野に関する学びの構造化と意識変容の過程
2. 研究方法
 - 2.1 調査実施期間：平成25年1月18日～3月14日
 - 2.2 調査対象者
 - 2.3 調査内容
 - 2.4 分析方法
 - 2.5 倫理的配慮
3. 研究結果
 - 3.1 社会人学生の背景
 - 3.2 KJ法を用いた質的統合法の結果
 - 3.3 形態素解析の結果
 - 3.4 階層的クラスター分析の結果
4. 考察
 - 4.1 KJ法とテキストマイニングからの示唆
 - 4.2 社会人学生に対する教育に向けての検討
5. 研究の限界と今後の課題

1. 研究の背景と目的

1.1 離職者訓練としての介護分野の担い手となる人材育成の現状

少子・高齢社会において、介護分野では利用者本位で質の高い福祉サービスを提供する事が求められ、その根幹である福祉人材の養成・確保が極めて重要となる。図1に示されるように厚生労働省では「平成21年4月から、求職者を対象に、介護福祉士の資格取得を目指した2年間の職業訓練を順次開講し、介護分野の担い手となる人材を育成するため、全国で約3,760名の介護福祉士養成コースを実施している」¹⁾。またこの制度を活用し、より多くの求職者が受講することを積極的に支援している（続けて「働きながら資格を取る」雇用プログラムも創設されたが平成23年度入学で終了した）。雇用情勢が厳しい中で、これらの事業により介護福祉士養成施設には年齢、学歴、職歴などが異なる多様な社会人学生が入学し、全入学者数の2割以上を占める。また平成24年度介護福祉士養成施設における卒業生の未就業者が6.2%と前年度の3.0%から大きく増加している。さらに社会人学生の未就労者は全社会人学生の12.4%にのぼる²⁾。労働政策研究報告書では離職者訓練生は応募の動機には幅があるものの、教育内容への満足度、就職希望状況には大きな違いはなく、専門職として資格取得に向けたカリキュラムとして確立されていることが、多様な属性の訓練生に共通に適用できる基盤となっている³⁾としている。しかし教育内容や教育方法は高等学校卒業直後の一般学生を想定したものである。多様な背景と資質をもつ社会人学生に対して、介護福祉士養成カリキュラムは、現在のところ適用性が示されておらず、社会人の持つ経験や資質を活かした学習や教育方法は検討の余地があると考えられる。そのため介護福祉士養成施設に入学した、社会人学生の学習体験の構造化を検証し、介護福祉分野に対する職務意識の変容について明確化する必要がある。

図1 介護人材の養成に向けた職業訓練の重点的な実施¹⁾

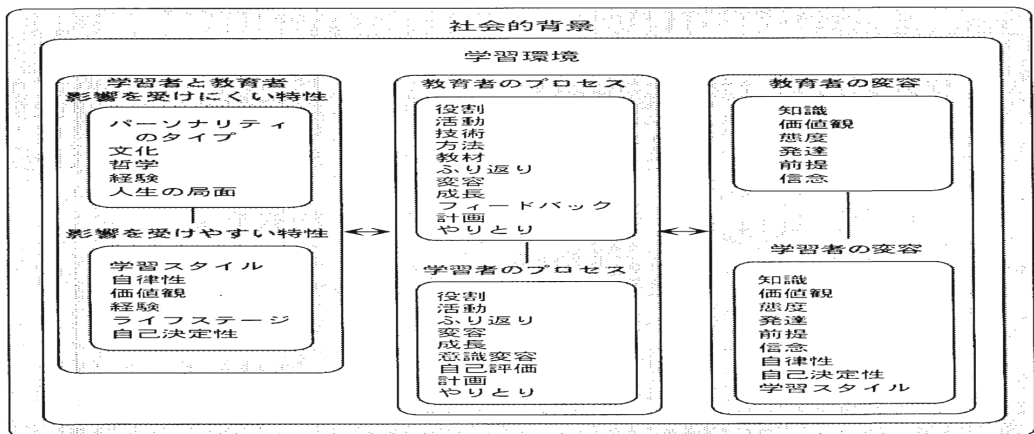


1.2 介護福祉分野に関する学びの構造化と意識変容の過程

離職者訓練として、介護福祉教育を受けている社会人学生の学びに関する質的研究は多くはない。一連の研究で宮上は個別面接調査（訓練生2年生6人、プログラム生1年生7人）を実施した。社会人学生の学びの過程には「【養成校入学に至る過程】【学びの場に馴染む過程】【職場に馴染む過程】【実践的な学びに馴染む過程】【学びによる内面的な変化】」があり、またコミュニケーション力と生活支援の技術の保持をしている事を強みとして認識していた。さらに社会人としての経験の活用や省察という概念が学習のプロセスを分析するためのキーワードになる⁴⁾と述べている。社会人としての経験については「人間成長・発達するにつれて、経験の貯えを蓄積するようになるが、これは、自分自身および他者にとってのいっそう豊かな学習資源となる⁵⁾」とされている。また「行為の中の省察（reflection-in-action）というプロセス全体が、実践者が状況の持つ不確実性や不安定さ、独自性、状況における価値観の葛藤に対応する際に用いる〈わざ〉の中心部分を占めている⁶⁾」とされ社会人学生が培ってきた力は、介護福祉学を学ぶうえで豊かな学習資源を持ち、新たな局面へもその対応力が十分活かされていくと推察される。

P・A・クラントンは「学習者と教育者は、それぞれ独自の経験、特性、価値観、信念をもっており、学習プロセスの中でもともに学習に取り組んでいる。学習プロセスには、プロセスの一部としての変容が含まれており、その結果として思考、価値観、態度、行動の変容が生まれる⁷⁾」と述べ、図2のように取り組むためのモデルを示している。

図2 出典：おとなの学習者とともに取り組むためのモデル⁷⁾



それでは学習者に対して教育者のどのような役割や行為が意識変容の学習を促進するのだろうか。田中らは社会人学生に介護教育を行なう教員側から調査を行い、社会人学生が入学することによるプラス面には【一般学生への良い影響】【社会人の強み】【事業としてのプラス面】【社会人学生への思い】、マイナス面では【一般学生への懸念】【教育・事務量の増加】【教育上の困難】【社会人の欠点】【事業の制度面での課題】【事業運営上の課題】を挙げ、「養

成校だけでは解決できない様々な課題があり、教員は社会人学生の自己覚知の促進、健康上の配慮、家庭事情で欠席した場合の補講など教育上の工夫や配慮を行っている⁸⁾ ことを明らかにしている。また社会人学生はマナーや学習意欲において一般学生に良い影響を与えている。一方で社会人学生は固定観念があり「介護を学ぶ上で社会人経験が邪魔をする」⁹⁾ というように社会人学生の意識変容には、難しさも抱えている。さらに宮上らは働きながら学ぶプログラム生が、図3が示す様に、入学から卒業後の年次ごとに①自分への思い（介護の仕事への思い）、②他者への思い（利用者に対する思い）、③つながり（人間関係）の3項目に分類しカテゴリーの変化を整理している。「介護の仕事への思いでは1年の時は自身の持つ価値観や力を意識し、2年の時には自身の力量を高めたいという思いをもち、介護職員となってからは職場における役割を意識するとともに、理想とする介護を目指す方策を考える視点を持っている」¹⁰⁾ としている。

図3 出典：プログラム生から介護職員に至る変化¹⁰⁾

	プログラム1年生	➡	プログラム2年生	➡	介護職員
介護の仕事に関する思い	職業として介護を選択		知識と実践をつなぐ		介護職としての基本的な姿勢
	介護教育の意義		介護に関する視野の広がり		介護現場での仕事の特性
	自身の価値や力を意識		自身の力量を高めたい		理想とする介護を目指す方策
	自身の働き方		具体的な働き方		職場における役割を意識
利用者に対する思い	利用者主体		利用者を理解		利用者を優先する
人間関係	プライベートな関係		連携するための力		職場における関係と階層
	所属先での人間関係		職場における自分の存在		
	世間からの見られ方		職場環境を主体的に評価		人間関係の重要性

このような過程で、介護職がもつ仕事に対する意識の前提となるものは、介護職自身ももつ「介護観」であると考えられる。「介護観」とは利用者視点に当てた『『ケアの方向性・考え方』だけでなく、働き方や仕事への取り組み方を含むものとしてとらえ『介護職員が介護の仕事に取り組む際によって立つ価値観および態度』¹¹⁾ と定義される。しかし、養成校における学習と介護現場における介護観との関係についての解明はなされていない。また介護福祉士養成校入学前の職業経験が、介護現場における、介護観にどのような影響を与えているのかについても明らかにされていない。

ここでは介護福祉士養成施設に入学し、訓練事業を利用した社会人学生の学習体験の構造化を検証し、学びの過程でどのように社会人学生が影響を受け、介護福祉に関する価値観と職務意識が変容しているのかを明らかにする事を目的とする。このことは社会人学生に対する教育のあり方を考えるうえでも、必要かつ重要な課題と位置づけることができるだろう。

2. 研究方法

2.1 調査実施期間：平成25年1月18日～3月14日

2.2 調査対象者：離職者訓練事業を受けている、A介護福祉士養成施設の社会人学生に対してアンケートを実施した。2年生11名、1年生10名、全体では21名である（配布は25、回収は21、回収率は84.0%）。

2.3 調査内容：質問紙による自由記述形式のアンケートを実施した。社会人学生の属性としては①性別②年齢③最終学歴④専攻⑤入学前の職業⑥勤続年数である。内容は宮上の社会人学生の学びの過程を参考に①養成校に入学するきっかけにはどのようなことがありましたか。②学校に馴染む過程ではどのようなことがありましたか。③実習に馴染む過程ではどのようなことがありましたか。④学校や実習での学びで、介護や自身の考えかたにどのような変化がありましたか。⑤学習は介護福祉分野への就職にどのようにつながっていますか。⑥学習や学校全体に対する意見・要望がありましたら自由に記述してください。の計六つの項目から自由記述を求めた。得られたデータは養成校での学習過程全体のデータとした。

2.4 分析方法

自由記述で得られたデータは、KJ法により内容を整理して質的統合法を行った。その後、樋口によるKH Coder¹²⁾を用いてテキストマイニングの手法で質的データ解析を行った。まず形態素分析（言葉で意味をもつ最小単位に言葉を分割し、それぞれの品詞を判別する）を行い、次にクラスター分析（構成要素の類型化をする）を行った。KJ法はテキストデータの質的分析法として広く普及しているが、作業者の主観に左右されやすいという弱点がある。テキストマイニングによる計量分析結果と対応することでその弱点を補い客観性を保つことができる。またKJ法により、テキストマイニングによる文章の意味づけや文脈情報の補完を図った。これらのことにより、社会人学生の学習体験の内容を客観的に明らかにした。

2.5 倫理的配慮

対象者には、研究目的、研究参加への自己決定の権利、プライバシーの保護の方法、得られたデータの取り扱い等について事前に口頭と文書にて説明を行い、文書にて同意を得た。

3. 研究結果

3.1 社会人学生の背景

A介護福祉士養成施設における社会人学生の背景は表1～6が示す通りである。2年生11名（女性8名、男性3名）、1年生10名（女性7名、男性3名）、全体では21名、性別は女性15名、男性6名、年齢は20代4名、30代8名、40代2名、50代7名である。最終学歴は高

等学校卒業が8名(38.0%)、それ以上の学歴での専攻は13名中その他が8名(61.5%)、職種は事務職、製造・販売業がそれぞれ5名(23.8%)、次いで金融関係、サービス業が各3名(14.3%)などと多種多様な職種からの入学であり、勤続年数は5～10年が7名(33.3%)と最も多く、15年以上は6名(28.6%)である。

表1～3、5、6：N=21（2年生11人、1年生10人）

表1

性別	人数	%
女性	15	71.4
男性	6	28.6

表2

年齢(歳)	人数	%
20～29	4	19.0
30～39	8	38.0
40～49	2	9.5
50～59	7	33.3

表3

最終学歴	人数	%
高等学校	8	38.0
専門学校	6	28.6
短期大学	2	9.5
4年制大学以上	5	23.8

表4 (N=13)

専攻	人数	%
福祉系	1	7.7
教育系	4	30.8
その他	8	61.5

表5

職種	人数	%
事務職	5	23.8
製造・販売業	5	23.8
金融関係	3	14.3
サービス業	3	14.3
出版関係	2	9.5
福祉職	1	4.8
美容師	1	4.8
警備	1	4.8

表6

勤続年数	人数	%
0～5年未満	3	14.3
5～10年未満	7	33.3
10～15年未満	5	23.8
15～20年未満	3	14.3
20年以上	3	14.3

3.2 KJ法を用いた質的統合法の結果

表7に示す記述データはKJ法を用い整理した。全体で125枚のラベル（数字で通し番号を付記）から項目毎に（先頭にアルファベットと数字番号を付記）見取り図を作り、さらに全体に集約し図4に示すようにシンボルモデル図を作成した。その図解に沿って以下の結論文を導きだした（図4の解説にもなる）。

社会人学生は養成校入学に至る過程では、ハローワークで勧められた事をきっかけに、家族介護からの関心や社会的状況から入学を選択した。それから学びの場に馴染む過程では、「若い学生の考え方」や「社会人学生のモラルのなさ」に戸惑ったが、一般学生や仲間との「楽しい交流」が持てるようになってとともに、学習により「新しい発見と知識が得られる」ようになった。実践的な場に馴染む過程では、「介護の難しさ」を感じたが、「適切な指導」にささえられ、実習が終わる頃には別れが辛いと思うほど「良い経験」をした。学校・実習における両方の学びから内面的な変化を遂げ、人の尊厳、生き方等について意識するようになり、「精神的に成長できた」。介護福祉の視点は「相手を思いやる気持ち」や「その人らしい暮らし」に変化し、利用者の内面を知る技術も大事だと認識した。これらのことから「知識がある分自信」となり、介護福祉分野への就業に繋がった。

表7 介護福祉士養成教育に対する社会人学生の学習過程に関するKJ法による自由記述整理の結果

過程・変化	カテゴリー	記述内容例	頻度
1. 養成校入学に至る過程	・ 事業の紹介	ハローワークで勧められた。就職に役立つ。	9
	・ 介護への関心	家庭介護（両親や親戚）を経験して	7
	・ 知識と資格の必要	専門知識と国家資格を取得し、安定した職場を得るため。施設で仕事をしていて、2年間学んだ人の知識は違うと感じた。	4
	・ 社会的状況	社会貢献したい、地域問題、東日本大震災ボランティアで福祉に興味を持った。	2
2. 学びの場に馴染む過程	・ 若い学生の考え方への戸惑いと楽しい交流	一般学生の勉強に対する姿勢に戸惑う、一方で同じ社会人仲間、年下の学生との交流が嬉しかった。	10
	・ 社会人委託生のモラルのなさ	介護職に資質的に向いていない社会人委託生の人間性に戸惑った。	5
	・ 実習、勉強への不安	学習内容のレベル、学校と家庭の両立。	4
	・ 新しい発見と知識	新しい発見や知識を得られ、利用者の行動の意味も分かる。	2
	・ 後ろめたい気持ち	失業保険をもらいながらだったので、一般学生に対してうしろめたい気持ちがあった。	1
	・ 特別なない	特別なし	1
3. 実践的な学びの場に馴染む過程	・ 介護の難しさ	全く知らない心身に疾患を持つ利用者の介助は難しかった（特に認知症の利用者の内面、食事介助、トランスファー、重度者の対応、コミュニケーション、記録）。	6
	・ 適切な指導	利用者や職員とのふれあい、的確なアドバイス。学校での事前授業や実習中の指導。実習先の方はやさしく、よく教えてくださり、介護の考え方を身につける上で必要、利用者が父母と重なり有意義。授業で学んだことが実習で理解できた。1段階では無我夢中、2段階は施設の内容、3段階は在宅、4段階では利用者を理解したいと思えた。	4
	・ コミュニケーションの大切さ	コミュニケーションの大切さを感じ、実習が終わる頃には別れが辛いと思うほど感情が入った。実習先の方はやさしくよく教えてくださり介護の考え方を身につける上で必要。	3
	・ 体力的な厳しさ	夏場の実習はスケジュールがハードで体力的に厳しかった。	2
	・ 介護を行う	素直に学び先入観やこだわりを忘れ、利用者に仕えるよう働こうと思った。戻りたい、この仕事が好きである。	2
	・ よい経験	実習ではよい経験をした。	3
	・ 精神的な成長	人の尊厳、生き方、人権などについて意識するようになった。自分自身の欠点も受け入れ大事にするようになり、人生におけるエポックメイキングにもなった。	8
4. 学びによる内面的な変化	・ 介護福祉の視点の変化	「相手を思いやる気持ち」「その人らしい暮らし」を考えるようになった。利用者の内面を知る技術も大事だと認識した。自立支援、介護はすべて手助けしなければと思い込んでいた。	6
	・ 介護福祉に携わりたい	理解が深まり福祉に携わりたいと思える。資格なしでもできる仕事だが、沢山の知識を持ってやる仕事だ。	5
	・ 向上心を持つ	介護の深さ、おもしろさを知った。勉強しようと思欲、向上心が増した。	5
	・ 自信がついた	自信がついた。行ってきた介護が間違っていないのだと分かった。	2
	・ 介護は役に立つ分野	介護はとでも役立つ分野。若い世代を理解することも今後役立つ。	1
	・ 実習での大切な気づき	学校の中では特別なものはないが、実習は大切な気づきがあり本当によい勉強をした。	1
	5. 介護福祉分野の就業への繋がり	・ 知識がある分自信に繋がる	大いに繋がった。学校で学ばずに現場に出たら利用者に対して不適切な接し方をしていた。一般学生は気づいていないかも知れないが、各教科の資料は宝だ。知識がある分自信に繋がり、対人コミュニケーションの精神的にも強みになっている。
・ 自分の考えも生まれる		基本を知り、知識を付けることで自分の考えも生まれる。	1
・ 社会に出てからが大切		日々一歩一歩が大切、社会に出てからがスタート。	1
・ ない		特別なない。	1
6. 学習に対する意見要望	・ 学習意欲は高まった	社会人の生涯学習をおこなう。臨床心理士も養成する。介護保険士の講座を通常の授業でも。社会福祉士、精神保健福祉士、保育士、ヘルパーの通信教育、大学院を創設してほしい。どの教科も資料管理が大変。国試対策もこなしたい。暗記が苦手、学習方法を知りたい。略痰吸引の授業を受けたい。現場では他職種との連携、リスクマネジメント等疑問を感じることも多いが、知識不足だった。	6
	・ 丁寧な教育	丁寧に根気強く教えてもらい感謝。短大なのにクラス単位のシステムに感動した。	3
	・ 実習期間の問題	実習時期を夏だけでなく、冬期にも設定してほしい。障害の施設でも実習したかった。実習との関連で授業を進めてほしい。	3
	・ 利便性・設備について	他の駅にもスクールバスを運行すべき。保育所を設ける、卒業生への図書館の開放も要望する。	3
	・ ない	別にない。	1
		合計	125

図4 介護福祉士養成施設における社会人学生の学びの過程 (全体シンボルモデル図)

介護福祉分野の就業への繋がり (卒業後の進路決定)

・知識がある分自信に繋がる

利用者に対する適切な接し方、対人コミュニケーションの精神的にも強みになり、基本知識を得ることで、自分の考えも生まれ、さらに学習意欲は高まった

これらのことから

学びによる内面的な変化

・精神的な成長

人の尊厳、生き方、人権などについて意識、自分自身の欠点も受け入れ、エポックメイキングになった

・介護福祉の視点の変化

「相手を思いやる気持ち」「その人らしい暮らし」
利用者の内面を知る技術も大事だと認識した

実践的な学びの場に馴染む過程

・介護の難しさ

全く知らない心身に疾患を持つ利用者の介助

・本当によい体験

実習が終わる頃には別れが辛い

・適切な指導

利用者や職員とのふれあい、的確なアドバイス
学校での事前授業や実習中の指導

ささえられ

学校・実習両方の学びから

学びの場に馴染む過程

・学生の考え方への戸惑いと楽しい交流

同じ社会人仲間、いろいろな分野の人、
年下の学生との交流

・新しい発見と知識が得られる

利用者の行動の意味も分かる

・社会人学生のモラルのなさ

人間性に戸惑った

・実習/勉強への不安

学校と家庭の両立

・特別なものはない

しかし

養成校入学に至る過程

それから

・事業の紹介

退職 ⇒ ハローワークで紹介

・介護への関心 ⇔ 家族の介護を経験

・知識と資格の必要 ⇔ 国家資格の介護福祉士⇔専門性を得たい

・社会的状況から選択 ⇔ 社会貢献がしたい

3.3 形態素解析の結果

六つの項目から得られた21名分の自由記述は、総抽出語は994語、異なり語は351語であった。テキストを文節単位の意味のある単語に分割し、分析対象語は373語である。名詞は「学生」「実習」「一般」「知識」「学校」などの客観語が多く、動詞は「思う」「感じる」「繋がる」などの主観語が多い。表8に頻出語3以上、上位20語を示す。

表8 頻出語（上位20語）

順位	語	出現数	順位	語	出現数
1.	学生	10	11.	持つ	5
2.	実習	9	12.	知る	5
3.	思う	8	13.	仕事	4
4.	一般	7	14.	資格	4
5.	知識	7	15.	卒業生	4
6.	介護	6	16.	大切	4
7.	学校	6	17.	大変	4
8.	人	6	18.	勉強	4
9.	感じる	5	19.	利用者	4
10.	繋がる	5	20.	クラス・コミュニケーション・ 技術・考え方・紹介・特別・ 本当に・良い	3

3.4 階層的クラスター分析の結果（図5、表9）

図5に示すようにWard法により、階層的クラスター分析を行った。形態素解析からの頻出語3以上を対象とし、形態素数131としてクラスター化した。

クラスター数は六つに分類された。図5にデンドログラムを示し、表9に表出語を整理したものを示す。

クラスター1は「持つ-学校-良い-介護-思う」で、「学校で介護への良い思い（価値観）を持つ」ことができた。「介護への良い思い」とは、介護福祉を学ぶ過程で、その結果として思考、価値観の変容が生まれ、本文に示される「介護はとても役立つ分野」という価値観を持つことができたことが表現されたと考えられる。

クラスター2は「勉強-人」であり、「人とともに人について勉強した」。クラスの中でも実習でも、本文から「若い学生の考え方に戸惑い」、「学校と家庭の両立」や「勉強について行けるか心配」だったが、「色々な分野の人がいて勉強」になった。一方、「社会人学生の人間性に戸惑う」という場面もあり、それぞれの場で人間を通して学び合った事が示されたと捉えられる。

クラスター3は「特別-本当に」は実習に関するまとまりに係っており、「本当に大切な考え方を実習で学んだ」と捉えられる。本文では実習で「特別ないが、本当によい経験をした」、内面的な変化に至る過程では「学校の中では特別なものはないが、実習は大切な気づ

きがあり本当によい勉強をした」と表現されていることから、実習から大きな影響を受けていることが確認できた。

クラスター4は「考え方-知る-実習-コミュニケーション-大切-紹介-繋がる」であり、「実習ではコミュニケーションが大切（であり、介護職への実感を得た）」と捉えられる。本文の「実習ではコミュニケーションが大切である」ことが学習過程全体に影響し、「実習先の方はやさしくよく教えてくださり、介護の考え方を身につける上で必要」というように介護専門職からの指導や働く姿からの影響により職務意識や就職に繋がり、自分が介護職になるという実感を得たと考えられる。

クラスター5は「資格-仕事-知識-感じる」であり、「仕事や資格には知識が必要だと感じる」とは、介護福祉分野への就業への繋がりや、「知識がある分自信になる」という本文から受け止められる。

クラスター6は「学生-一般-クラス-大変-多い」から、「一般学生とのクラスで（学習や人間関係の）大変さと多くの時間と体験を共有した」ことのまとめりと捉えられる。本文からは「短大なのにクラス単位のシステムに感動した」、「各教科資料管理が大変だが、これも一つの実践」などから表現されたと受け止められる。

図5 階層的クラスター分析の結果

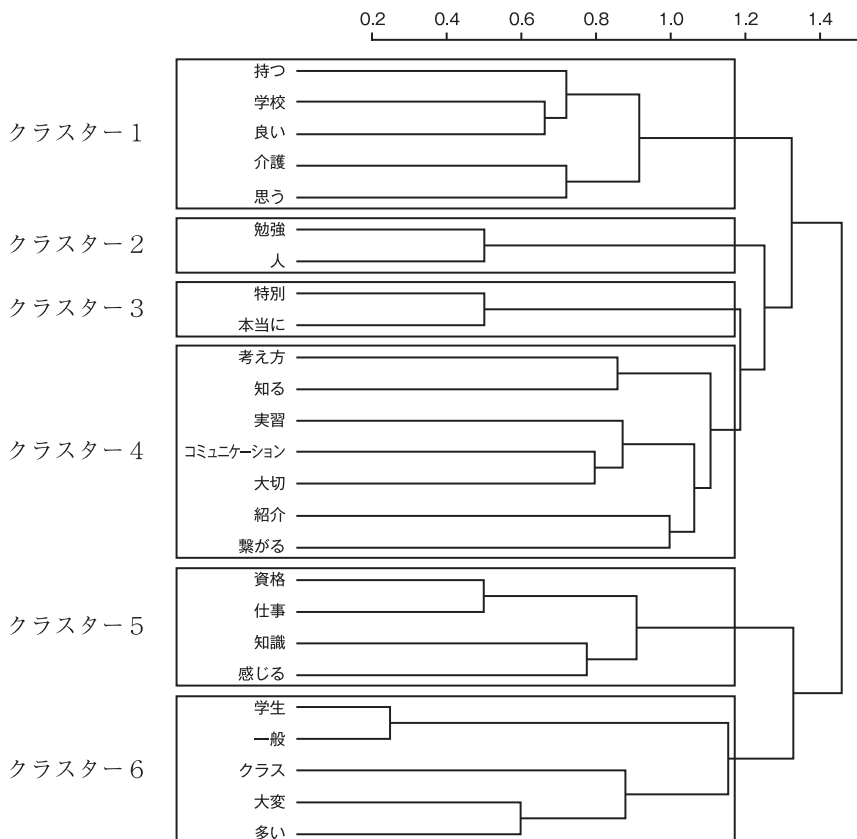


表9 階層的クラスター分析の結果 (Ward法)

1	持つ－学校－良い－介護－思う
2	勉強－人
3	特別－本当に
4	考え方－知る－実習－コミュニケーション－大切－紹介－繋がる
5	資格－仕事－知識－感じる
6	学生－一般－クラス－大変－多い

4. 考察

4.1 KJ法とテキストマイニングからの示唆

社会人学生が学ぶ過程で、介護福祉に対する価値観と職務意識についての記述は、KJ法から「事業を紹介された」「知識と資格に必要」「若い学生の考え方への戸惑いと楽しい交流」「介護の難しさ」「介護福祉の視点の変化」「いろいろな見方や考え方を知り精神的に成長」「知識がある分自信に繋がる」というまとまりが見いだされた。これらは先行研究の学習過程に対応する変容であると捉えられる。しかし「家族の介護で関心を持つ」という個人的な動機は先行研究では表出されていない。また先の教員側からの「一般学生への懸念」は、社会人学生側からも「社会人学生のモラルのなさ」というネガティブな記述があり学生生活に影響したととれる。さらに実習中での「適切な指導」は効果的であったことが窺われたが、これらの点は先行研究とは異なる結果であるといえる。

クラスター分析では六つの側面が明確化された。「人とともに人について勉強した」「一般学生とのクラスで（学習や人間関係の）大変さと多くの時間と体験を共有した」という学びの場、「学校で介護への良い思い（価値観）を持った」という内面的な変化、介護を行う事に意欲を持ち「仕事や資格には知識が必要だと感じる」は先行研究に対応していると考えられる。しかし「本当に大切な考え方を実習で学んだ」「実習ではコミュニケーションが大切（であり、介護職への実感を得た）」は、学習過程に実習が大きく影響していると捉えられる。またクラスター分析4で「紹介・繋がる」という言葉が含まれ「（ハローワークからの）紹介（が実習で）・（職務意識・就職に）繋がる」ことが見てとれる。実習で介護職への実感を得て、その後の学習や就業へと繋がる事が明らかにされた。しかし、実習での重要な視点となる、介護福祉の対象者である「利用者」という言葉は、形態素分析の頻出語では順位は19位であり、クラスター分析からは「利用者」という言葉は表出されていない。このことから「利用者に対する思い」について着目した取り組みが必要であることが示唆された。

4.2 社会人学生に対する教育に向けての検討

上記の見解から、社会人学生の養成教育のあり方を検討する。養成校入学のきっかけは、ハローワークで事業を紹介され、必ずしも社会人学生は自己決定的な学習を行っているとはいえない状況にある。しかし社会的状況から「福祉に興味を持った」ことで選択された場合

もあり、素養は備えられていると考えられる。入学までの準備段階は明確ではないが、その後の学習過程で介護福祉への視点や価値観が変化したことは、「学校では人の尊厳、生き方、人権等について意識するようになり、自分の欠点も受け入れるようになった」とする本文からも分かる。これらの変容に対する教育の効果的な方法として、社会人としての経験を生かせる省察という概念については「外から学習課題として与えるより、今まで身につけていた実践的な知などを意識化し、明確にしていくことが意味をもつ」¹³⁾とされており、それまでの生活体験から築いてきた判断力や応用力を振り返り、自らも気づき、表現する機会を持つ必要性が確認された。

実践的な知については、実習における影響が明らかになったが、「介護の難しさ」を感じつつも、「コミュニケーションの大切さ」を感じ、「実習が終わる頃には別れが辛いと思うほど感情が入った」。実習では、本当に「よい経験」をしたという、意識変容に影響するダイナミックな関係を捉えることができないのではないだろうか。介護は介護者だけが行うことではなく、利用者の力を借りて、協働して行われるものである。社会人の持つ強みの一つはコミュニケーション能力であるが、なおかつ強化の必要性を感じている。ケアの本質でメイヤーロフは「人の人格をケアするとは最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである。」¹⁴⁾と述べている。介護者と利用者との関係の中に、ともに成長する過程があることに気づくことで「介護とはなにか」を発見する喜びがあるのだと考える。

介護の対象者は「利用者」であるが、「介護の難しさ」で「利用者の内面」にも視点を向け「その人らしい暮らし」という言葉が表出されている。先の「利用者に対する思い」では「プログラム1年生では『利用者主体』という学んだ介護の基本用語を示すカテゴリーから、プログラム2年生では『利用者を理解』という自らが実践する内容に変化し、介護職員では現場において『利用者を優先する』という職務上の基本姿勢を示す内容になっている」¹⁵⁾とされ、利用者を明確に意識し、理解が深まることで、多角的な視点から考えて、適切な介護が見いだされ、介護を行う意味も分かる。

入江らは看護実習の場面から「実際の患者とのかかわりに加え、権力的ではなく、教育的・発達の働きかけを重視した看護師による対話形式の説明が効果的である」¹⁶⁾と述べている。本文の「実習先の方はやさしくよく教えてください、介護の考え方を身につける上で必要」というように、特に介護現場での指導は、適切性のある教育的・発達の働きかけの工夫も求められていることが確認できた。

また新たな価値観を受け入れ、態度を形成していくためには「実践知や暗黙知に基づく実践の中の直観的な省察をはっきりことばにする学びが大切になる」¹⁷⁾とされ、利用者に向き合い、視点を合わせた介護を行っていけるような実習や、学習上の取り組みの強化が必要であると考える。

さらに「介護職は、自分自身を含めて職場の人間関係を一つの力働関係として捉える視点があり、『職場における関係と階層』『人間関係の重要性』というカテゴリーが特徴的であった」¹⁸⁾。労働政策研究報告でも「『周りの人に喜ばれる仕事』『コミュニケーション能力の必

要性』を介護職の特徴と認知する傾向の高い施設ほど、卒業率が高い傾向もみられる」¹⁹⁾とされる。これらのことから、実習での学びが仕事としての実感を得て、介護の職場で働くイメージへ繋がるのが捉えられる。

先の「介護の仕事に関する思い」では、「介護職として就業している者は、理想とする介護を目指す方策を考える視点を持っている」²⁰⁾としているが、その視点とは専門職者としての「介護観」である。「知識をつけることで自分の考えも生まれる」という実習を含めた学校教育のなかで、介護の方向性を考え、仕事の信念が持てる「介護観」を形成していくものを、さらに探しだしていく必要がある。

その一方で「学校の中では特別なものはないが、実習は大切な気づきがあり本当によい勉強をした」という記述があり、確かな変容につながらなかった場合もある。「意識変容の学習は、自己批判的に振り返ろうとするプロセスであり、私たちの世界観の基礎をなす前提や価値観を問い直すプロセスである。価値観は必ずしも変えられるわけではないが、検討される」²¹⁾とされており、前提を問い直し、修正を加える環境と関わりを調整する必要がある。その中で自己覚知を促し、介護の仕事に対する肯定的な認識を、在学中に育てることができるよう工夫が求められている。

社会人学生は学習過程で基本を知り、知識を付けることで「自分の考えも生まれる」「学習を強みにつなげる」ことで就業へつながると考えており、学習経験による変化について認識できている学生が多かった。さらに学校での学びは、あくまでひとつの通過点であり「社会に出てからが本当の勉強である」とも捉えられ、学習意欲は入学前よりいっそう高まったともいえよう。

5. 研究の限界と今後の課題

社会人学生の介護福祉に対する価値観と職務意識について検討したが、計量的な分析によって、介護福祉やその学習過程におけるキーワードの占める位置を確認することができた。またクラスター分析では、実習関連から全体の学習過程へと繋がっていることが明らかにされ、KJ法による質的統合法からの結果とも重なる部分が確認された。

しかし今回の対象者である1・2年生は、1年生でも既に資格なしで就業経験があるものや、就職が既に決まり、放課後就業している学生もおり、同時に調査は行われた。このことは学習過程における、その内容や体験に時間的、量的な差異を生じさせている。

また社会人学生はそれまでの職業体験を通して、介護実践をどのようにとらえ、その視点をどのように活用したのかが表出されず、資質の特徴を捉え、経験を活かした教育方法は明確化していない。

今後はさらに多くのデータから、学次ごとの変化や卒後の追跡調査による継時的な段階、一般学生との比較などによって、社会人学生の学びの構造を明らかにして、教育的・発達の働きかけを見出していく必要があると考える。

来年度から介護福祉士養成施設においても、介護福祉士国家試験が導入される予定である。

また介護保険などの制度によっても介護現場の環境や価値観は変動すると予想される。それらも含めた学習プロセスの検討も必要である。このような状況の中で、将来にわたって福祉・介護ニーズに的確に対応できる、人材の安定的確保がさらに求められている。社会人学生に対しては「大人の学び」として、多様な生活体験を持つ学習資源と、行為の中での省察する力を活用できる介護福祉教育を工夫していくことで、養成教育の可能性と介護人材確保に繋げていくことができると考える。

注記・引用文献

- 1) 介護分野における人材確保について（厚生労働省提出資料）
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/shakaikondankai/kaisai/dai03/03siryou1.pdf> 2016年4月27日参照
- 2) 公益法人 日本介護福祉士養成施設協会、平成25年度定時総会資料、2013年5月25日配付
- 3) 19) 労働政策研究報告書 No.168
<http://www.jil.go.jp/institute/reports/2014/documents/0168.pdf> 2016年4月27日参照
- 4) 宮上多加子「離職者を対象とした介護福祉士養成教育における社会人学生の認識－学びの経験に関する個別面接調査に基づく質的分析」（『介護福祉教育』第17巻、第2号、pp.98-106、2012）p.98
- 5) 三輪建二著「おとなの学びを育む－生涯学習と学びあうコミュニティの創造」鳳書房、2011、p.39
- 6) 「省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考」ドナルド・A・ショーン著、柳沢昌一、三輪建二監訳、鳳書房、2009、p.51
- 7) パトリシア・A・克蘭トン、入江直子 豊田千代子 三輪建二訳「おとなの学びを拓く－自己決定と意識変容をめざして」鳳書房、2010、p.32
- 8) 田中真紀・宮上多加子「離職者を対象とした介護人材養成教育に対する教員の認識」（『介護福祉教育』第18巻、第2号、pp.40-48、2013）p.47
- 9) 同上
- 10) 15) 18) 宮上多加子・田中真紀「離職者を対象とした介護福祉士養成事業修了生の介護に対する認識と仕事の信念」（『高知県立大学紀要』第64巻、pp.1-16、2011）p.9
- 11) 白石旬子・大塚武則・影山優子・藤井健一郎・今井幸充「介護老人福祉施設の介護職員の『介護観』に関する研究－経験年数、教育・資格による相違－」（『介護福祉学』、第17巻、2号、pp.164-175、2010）p.165
- 12) 樋口耕一「KHCoder」、(<http://khc.sourceforge.net/dl.html> 2016年7月3日参照)
- 13) 三輪建二著「おとなの学びを育む－生涯学習と学びあうコミュニティの創造」鳳書房、p.150
- 14) 田村真、向井宣之訳、ミルトン・メイヤロフ「ケアの本質 生きること、の意味」ゆるみ出版、1988、p.13
- 16) 入江宅・小平朋江、「看護大学生の精神科保護室に対する受け止め方及び視点の変化－テキストマイニングによる非構造型データの分析から」（『聖隷クリストファー大学看護学部紀要』N0.15、pp.1-15、2007）p.8
- 17) 三輪建二著「おとなの学びを育む－生涯学習と学びあうコミュニティの創造」鳳書房、2011、p.152
- 20) 宮上多加子・田中真紀「離職者を対象とした介護福祉士養成事業修了生の介護に対する認識と仕事の信念」（『高知県立大学紀要』第64巻、pp.1-16、2011）p.8
- 21) P・A・克蘭トン、入江直子 豊田千代子 三輪建二訳「おとなの学びを拓く－自己決定と意識

変容をめざして」鳳書房、2010、p.204

参考文献

- ・ 藤井美和他「福祉・心理・看護のテキストマイニング入門」中央法規出版、2005年
- ・ 松村真宏他「人文・社会科学のためのテキストマイニング（改訂新版）」誠信書房、2014年
- ・ 樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展をめざして」、ナカニシヤ出版、2014年
- ・ 山浦春男「質的統合法入門 考え方と手順」医学書院、2012年

Summary

Awareness of Unemployed Persons Receiving Vocational Training to Become Certified Care Workers

Eiko Kato

The Government of Japan has recently established training programs for certified care workers in the “vocational training system for unemployed persons” to train and secure social service human resources. In this study, adult students from varied age groups, educational backgrounds, and professional careers, who had enrolled in these training institutions for certified care workers, were asked to describe their understanding of care and welfare and their learning during the training courses.

The obtained data were analyzed using the quantitative synthesis method (KJ method) and by text mining using a software called KH Coder. Based on the results, the following six characteristics were identified in the learning process of adult students: (1) “I have a good impression (sense of values) of care at the training institution,” (2) “I have studied about people together with the others,” (3) “I have learned an important method of thinking during exercises,” (4) “I have learned the importance of communication in the exercises and I have sensed the feeling of being a care worker,” (5) “I feel that knowledge is necessary to obtain a job and to be a certified care worker,” and (6) “I have understood the importance of learning and human relations, and I have shared different experiences with other students in the classes.” Exercises are conducted at training institutions for certified care workers to influence the transformation of adult students’ sense of values and job awareness with respect to care and welfare.

Keywords Certified Care Worker Education,
Training program for unemployed persons,
Client, Text mining Analysis, and KJ Method

(2016年11月10日受領)